

東京大学情報基盤センター設立記念式典について（報告）

本センターは6月30日（水）工学部8号館教授会室において、学内外関係者約230名の出席を得て設立記念式典を挙げていたしました。式典では、齊藤忠夫情報基盤センター長の式辞の後、前日に急遽欠席されることとなった、元大型計算機センター長でもありました有馬朗人文部大臣の祝辞を太田愼一文部省学術情報課長が代読、蓮實重彦東京大学総長から挨拶があり、引き続いて根元義章東北大学大型計算機センター長、富田眞治京都大学総合情報メディアセンター長から祝辞をいただき、その後、機器納入業者への感謝状の贈呈、感謝状に対する謝辞が述べられ式典を終了しました。

式典終了後、引き続き同室において、齊藤忠夫情報基盤センター長の「大学の情報化と情報基盤センターについて」と題する講演会が行われました。

式典に先立ち、前年度末に納入されたスーパーコンピューター、新教育用計算機システム、遠隔講義・会議システム及び電子図書館サービスの披露がなされました。

式典・講演会終了後、山上会館において記念祝賀会が開催され、齊藤忠夫センター長の挨拶、猪瀬博学術情報センター所長の祝辞をいただき、落合卓四郎附属図書館長の挨拶の後、青柳正規前副学長の乾杯の音頭により祝賀会が開催され、センターOBを交え、なごやかな雰囲気の中で祝賀会を終了しました。

なお、以下に当日の式次第とそれぞれいただきましたご挨拶・ご祝辞等をご紹介します。

東京大学情報基盤センター設立記念式典 式次第

[平成11年6月30日(水)]

【見学会】

(15:00~)

- 一． スーパーコンピューター (会場) 情報基盤センター 2階大計算機室
- 一． 新教育用計算機システム (会場) 8号館教授会室 駒場からの中継映像
- 一． 遠隔講義・会議システム (会場) 工学部3号館36番教室(発)と8号館85番教室(受)を結び講義中継公開
- 一． 電子図書館サービス (会場) 8号館教授会室 プレゼンテーション

【記念式典】

(会場) 工学部8号館 教授会室 (15:45~)

- | | | |
|----------|-------------------|-------|
| 司会 | 情報基盤センター教授 | 金田 康正 |
| 一． 式 辞 | 東京大学情報基盤センター長 | 齊藤 忠夫 |
| 一． 祝 辞 | 文部大臣 | 有馬 朗人 |
| 一． 挨拶 | 東京大学総長 | 蓮實 重彦 |
| 一． 祝 辞 | 東北大学大型計算機センター長 | 根元 義章 |
| 一． 祝 辞 | 京都大学総合情報メディアセンター長 | 富田 眞治 |
| 一． 感謝状贈呈 | 東京大学情報基盤センター長 | 齊藤 忠夫 |

株式会社日立製作所 殿

日本電気株式会社・日本電気リース株式会社 殿

富士通株式会社 殿

日本電信電話株式会社 殿

- | | | |
|------------|---------------|-------|
| 一． 謝 辞 | 株式会社日立製作所 副会長 | 桑原 洋 |
| | 日本電気株式会社 社長 | 西垣 浩司 |
| 閉会 (16:26) | 情報基盤センター教授 | 金田 康正 |

【講演】

(会場) 工学部8号館 教授会室 (16:27~16:55)

「大学の情報化と情報基盤センターについて」

講師 齊藤 忠夫 東京大学情報基盤センター長

【記念祝賀会】

(会場) 山上会館 1階ロビー(17:00~)

- | | |
|------------|---|
| 開 宴 | 吉岡 顕 情報基盤センター助教授 |
| 一． センター長挨拶 | 齊藤 忠夫 東京大学情報基盤センター長 |
| 一． 来賓祝辞 | 猪瀬 博 学術情報センター所長
(元教育用計算機センター長・元大型計算機センター長) |
| 一． 挨拶 | 落合卓四郎 東京大学附属図書館長 |
| 一． 乾 杯 | 青柳 正規 大学院人文社会系研究科教授(前副学長) |
| 懇 談 | |
| 閉 宴 | 吉岡 顕 情報基盤センター助教授 (19:00) |

式 辞

東京大学情報基盤センター長

ご紹介いただきました、東京大学情報基盤センター長の齊藤でございます。

本日は、東京大学情報基盤センターの開所披露式典に当たりまして、天気の悪い中、また、ご多忙にもかかわらず、多数の皆様にご来場をいただきまして、心から感謝申し上げます。

東京大学情報基盤センターは、東京大学大型計算機センター、東京大学教育用計算機センターに附属図書館の電子図書館部門を一体化し、さらに、多くの学内のご協力をいただき、本年4月に設立されました。東京大学大型計算機センターは1965年からの歴史を持っており、教育用計算機センターは1972年からの歴史を持っています。当然、附属図書館は、大変古い120年に及ぶ歴史を持っておりますので、大学の中で長い間定着し、東京大学の情報創造、情報管理、情報発信にそれぞれ貢献してきた組織が一体化し、融合して効果的に東京大学の情報化を進めて行くという目的で設立されたものでございます。

大学のあらゆる活動にとって情報技術の重要性は強調しすぎることはないほど重要な問題でございます。大学においてコンピュータが広く活用されるようになったのは1960年代からでございますが、東京大学ではそれ以前から多くの先輩の努力によってコンピュータを自ら開発し、活用する努力が行われてまいりました。大型計算機センターの発足によってそれが急速に一般化いたしました。計算機はその後着実に進歩し、高性能化し、低価格化してまいったわけでございます。高性能化の点では今日ご覧いただいたスーパーコンピュータは1TFLOPSという性能を持っておりますが、今年の3月から稼働いたしております。この性能はコンピュータの技術にとっては長い間の夢とされていた性能でございます。性能の点においては、昨年のおそくにアメリカのエネルジー省の研究所で私どものスーパーコンピュータの3倍位の能力を持つスーパーコンピュータが入っておりまして、ゴア副大統領と一緒にスーパーコンピュータの写真が出ていたのを新聞でご覧になった方もおられるかもしれませんが、そういう意味では世界最大のコンピュータではないわけでございますが、日本最大のコンピュータであることはもちろんでございますし、世界のコンピュータ性能リストの中でも、6月のレポートでは4位だということでございます。これは1ノード当たり8GFLOPSという機械を128台接続したものでございますが、消費電力その他の点から考えても世界でももっとも優秀な機械であると考えております。私どものセンターには、その他に3年前から運用しております300GFLOPSの超並列機がございますが、この2つのラインアップを持っているようなセンターは世界でもまれなのではないかというふうに思っております。

こういったコンピュータの高性能化とは別に1980年代から多数のワークステーション、パーソナルコンピュータが大学の研究室でも活用されております。これらは多様なハードウェアで構成されておるわけでございますが、その内インターネットに接続されているものだけでも東京大学の中では25,000台を超えるというふうに登録されております。それ以外にもほぼ同数以上のパーソナルコンピュータが東京大学の中で使われております。

こういった多数のコンピュータを使いやすくし、ネットワークでそれを接続し、教育・

研究・業務に活用するということは今では大学では不可欠な存在となっておるわけですが、そういったコンピュータネットワークが安定に運用することが求められているわけでございます。

そういったコンピュータやネットワークを大学の中で安定に運用し、サポートしていくことは大学の全構成員の研究教育の活動の活性化に不可欠な配慮になっております。

また、コンピュータは計算のためでだけではもちろんないわけございまして、大学の情報を発信し、研究のための情報を収集し、学生が多様な情報にアクセスするための手段としても大変重要になっております。東京大学では文献検索サービスを1975年から始めておりますが、図書の電子化も世界的に進み、学術情報の伝達として印刷媒体と共に電子媒体はますます重要なものになっております。これらの活用はもちろん大学からの情報発信の活性化にも重要なものでございます。電子図書館機能は情報時代の大学に不可欠な機能であるわけございまして情報基盤センターの重要な機能として電子図書館機能を含めております。

また、学生の教育におけるコンピュータの重要性はますます重要でございます。おかげさまで、情報基盤センターでは5年前から使用されていた機械に代えて、本年3月からクライアントサーバ方式による1,600台のコンピュータを持つ学生教育システムを稼働させております。これは大学における全コンピュータの台数からすればわずかなものでございますが、多数の同じ性能のコンピュータを並べ教育に都合のいいように設置すると、それを如何に安定に運用し、多数のコンピュータをいつも学生が使える状況にするということは非常に重要な技術でございます。このコンピュータの主要部分は駒場に設置されておまして、今日直接お目に掛けることはあまりできませんでしたが、先程、テレビでご覧いただいたと存じますが、非常に多数のコンピュータが使われております。

大学の情報化の要求はますます多岐にわたっており、そのすべてについてサポートを行うことは限界があるわけでございますが、情報基盤センターとしては、できるだけ教官、学生の全部の学術活動を活性化し、それに如何に情報化を進めていくかということについて、多様な研究を進め大学として能率のいい情報化を推進できるということについての研究をしていくことも含め、大学の情報システムのサポートを活性化していきたいというふうに思っているわけでございます。

センターは、誕生したばかりでございます。全体にわたる期待に比べ、設備の予算のうえでも、運営のための人的側面でも不足していることが多々あるわけでございます。みなさまのご支援により一層充実したセンターをつくってゆき、みなさまの期待にこたえながら大学の情報化を活性化していきたいと思っております。これまでのご支援に感謝するとともに、今後ともますますご支援ご鞭撻をお願いしてご挨拶申し上げるしだいでございます。

どうもありがとうございました。

有馬朗人文部大臣ご祝辞

本日ここに、東京大学情報基盤センター設立記念式典が挙行されるにあたり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

近年、情報技術の進歩は著しく、あらゆる社会活動に大きな変化を生じさせており、我が国が、二十一世紀に向けて、豊かで潤いのある社会を実現するために重要な役割を担うものとなっております。

特に、スーパーコンピュータ、情報ネットワークなどの情報基盤の整備充実、情報分野の研究開発の推進は、全ての学術研究の発展を支える原動力として期待されており、高度な研究活動を支援するとともに、学生に対する情報教育の多様な発展を図ることが急務となっております。また、大学が世界的水準の研究教育を展開するだけでなく、産業界、地域との連携により社会に貢献する手段としても各種情報基盤は重要な役割を担っております。

東京大学情報基盤センターは、このような趨勢を踏まえ、前身の大型計算機センターと教育用計算機センターを統合・再編し、図書館の機能も一部取り込み、大学における情報活動を高度に支援するための基盤を提供するとともに、情報化を推進するための研究開発を行うことを目的として、新たに設置されました。

本センターは、東京大学における情報基盤の刷新と強化はもとより、大学が情報化社会における我が国の先端的モデル機関として位置づけられるための牽引的役割を果たすものと期待されております。

今後、関係各位が英知を結集され、なお一層の御努力により、本センターが学内外の情報拠点として重要な役割を果たし、我が国の学術研究・教育の一層の充実向上に大きく寄与されるよう、心から念願しております。

最後に、本センター設立に御尽力された総長はじめ関係各位のこれまでの御労苦に深く敬意を表しますとともに、貴学並びに御臨席の皆様益々のご発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。

蓮實総長ご挨拶

只今ご紹介いただきました蓮實でございます。

本日の、情報基盤センターの開所式にあたりまして、一言ご挨拶申し上げたいと思います。この情報基盤センターの構成等について、先程センター長からすでにお話ございましたが、私としては、ある理想的なグルーピングと申しますか、あるまとまりができたというふうに思っております。一方で、大型計算機センターがあり、教育用計算機センターがあり、そしてさらにそれを使って情報発信していかなければできない図書館機能というものがございまして、それが一つにまとまって、さらに大きな力を発揮する基盤が出来たということは東京大学にとって大変喜ばしいことであると同時に、さらにこれを基盤といたしまして、より大きな組織なり、なんなりへと発展していく一つの足掛かりといたしまして、今日のこの開所式が非常に深い意味があるかと思っております。

21世紀は、情報の時代だというふうに言われておりまして、私もそのとおりだと思っておりますが、情報という言葉は、しばしばその同床異夢と申しますか、同じ情報という言葉を使っていながらも、全く別なことが想像されがちであるところのある意味では、危険な言葉でございます。ほかの学問の中でこれほど対象となっているその言葉そのものに複数の解釈が可能となるというような学問形態はございません。それが私はまずまず21世紀に当たって面白い現象をつくってくれるというふうに思っています。

それからもう一つ、私は現在情報科学と言われているものが、ある嫉妬を他の研究領域の人たちにまき散らしているところがある。これはよく引かれる例でございますし、ご承知の例かと思いますが、ある口の悪い物理学者 - これは有馬元総長ではございませんが、情報科学者というのは、自分の左足がどちらかであるという情報さえ持たずに、情報のことを考えているということを申します。それは、アメリカにおける物理学に対する資金繰りの悪さといったようなものを反映していることかと思いますが、ともすれば、そのような嫉妬を巻き立てかねない学問であるということが、私の好奇心を強く刺激いたします。だれの嫉妬も巻き起こすことのないような学問は、そもそも学問ではありません。あらゆる学問は多くの人の嫉妬と誤解を巻き立てるような、そのようなものであって欲しいと私は思っておりますので、これは誠にめでたい21世紀への第一歩であるというふうに考えている次第でございます。

このセンターの設立にあたりましては、実に多くの方のご支援を得ましたし、ご理解も頂戴しましたわけでございます。私としてはこのなかに、図書館が入ったことが非常にうれしいことだと思っております。本日もお見えでいらっしゃいますが、前図書館長の六本先生ほか多くの方々のご理解に心から御礼申し上げたいと思っております。次第でございます。

今後これをどのように活用していくかというのはこれは私たちの英知と申しますか知性によることでございますが、現在行政改革というものが進められておりまして、多くの部門でことによると25%の定員削減があるやに伺っておりますが、このようなセンターが出来たときには、そこへの人的投資というのが最大の問題でございます。単に機械があっただけではいけない、装置があっただけではいけない。今後、東京大学がそこに

どのような人的資財を投入していくことが出来るか、これが今後この基盤センターの未来を大きく左右していくことだと思っております。総長として可能なことをしたいと思っておりますが、なにせ、独立行政法人問題等を見据えますと、私自身も考え込んでしまうような状況が日々起きております。この種の組織には補助職員が絶対に必要であり、それなしに、これが本当に機能できるのかどうか、機能できない場合はそれ以外の方々が犠牲にならなければいけないというのが、現在の日本の貧しい状況でございます。

私は、中国の精華大学のこの種のものを見せていただきましたが、補助職員の数等々、あちらの経済的な状況というものがございましょうが、100人単位で人が動いているということでございます。それに比べ、東京大学がこれだけの規模の大学でありながら、何人の方々をこのセンターに人材として投資できるのかということに関しまして、私は若干暗い見通しを持っておりますが、それは、この設立にあたって、多くのお力を添えていただきました皆様方のさまざまなお力添えによって克服して行けることかとも思っておりますので、今後ともどうぞこのセンター、そして、東京大学における情報の問題に関して、より多くのお力添えを頂戴したいと思っております次第でございます。なお、このセンターの設立にあたりましては、文部省、そして、このさまざまな設備を導入していただきました企業の方々等々多くの方からご支援を受けております。本日の開所式にあたりまして、深い御礼を申し上げまして私のご挨拶にかえさせていただきます。どうもありがとうございました。

東北大学大型計算機センター 根元センター長ご祝辞

只今紹介いただきました、東北大学大型計算機センターの根元でございます。

東京大学情報基盤センターの設立、誠におめでとうでございます。心からお祝いを申し上げます。

さて、皆様ご承知とは思いますが、我々大型計算機センターは大学の教員その他の研究者が学術研究等のために利用する全国共同利用施設といたしまして、昭和 40 年代前半に設置されております。当時、研究をする上で大規模科学計算の必要性が強く叫ばれまして、それに応えるものとして、設置されたものでございます。大規模科学計算への要望は時代をこえて存在いたしまして、そのスケールは増すばかりであります。

大型計算機センターは、設立以来、常に最新鋭の世界的にも最大級の大型コンピュータシステム、今ではスーパーコンピュータになりますが、これを 4 年から 5 年を目処に、運用いたしまして多くの利用者の方々にご利用いただいているところでございます。また、計算機利用技術に関する研究開発も行ってきました。

さらに、学内のみならず学外のネットワーク利用環境の運用整備にあたり、全国の研究者に最新の情報処理環境を提供いたしてきております。これにより学術研究の発展と学術情報の流通に大きく貢献してきていると我々は自負しているところでございます。このような学術環境の情報基盤を整備し、充実させていくということは極めて重要な使命でございます、今後とも変わるものではございません。

ただ、昨今の情報処理技術、ネットワーク技術、アプリケーションの機能の進展には眼を見張るものがございまして、社会活動の多くの分野で急激な変化をもたらしていることは周知のとおりでございます。大学におきまして、教育・研究はじめ、多くの領域において大きな影響を与えております。これまでにない新たな高度な情報処理の量が可能となりまして、その積極的な利用により新たな発展が期待されておるところでございます。当然のこととして、大学として総合的、統一的な観点から情報基盤の整備を図ることが必要となってきたところでございます。

申すまでもなく、大学における総合的な情報基盤のあり方は、各大学の状況によって異なるものでございますが、東京大学におかれましては、大規模科学計算支援、ネットワーク利用支援、情報処理教育支援及び電子図書館支援の環境を総合的に整備するという立場をとられ、情報基盤を担っている組織の縦割りの役割分担を再興され時代に即した情報基盤センターが新設されたものと理解いたしております。このことにより、現状の課題が解決され、情報基盤がより堅固なものとなり、情報基盤を活用した教育研究の高度化に対して大きく貢献されるものと私どもは強く期待しているところでございます。

ご承知のように、スーパーコンピュータはビックサイエンスをはじめ多くの研究分野にとって必須の研究機器となっておりますし、ネットワークや情報処理教育、電子図書館は先端研究にとって必須のアイテムとなっております。これらを有機的に結合していくことによって、大学における先端研究がますます充実していくことは間違いありません。発展し続ける情報基盤に対応していくためそれを支えていく組織への内外からの期待には大変大きいものがあると思います。全国に先駆けて設立された東京大学情報基盤センターが大学における新しい時代の重要な組織として、抱えている問題をクリアして成長発展されていくことを強く祈念して、祝辞とさせていただきます。

誠におめでとうございました。

京都大学総合情報メディアセンター 富田眞治センター長ご祝辞

東京大学情報基盤センターの設立まことにおめでとうございます。

大型計算機センター、教育用計算機センターおよび図書館の一部を統合され、先陣を切って情報基盤の抜本的改革を断行されました東京大学の先見性に深く敬意を表する次第でございます。

京都大学では、平成9年4月情報処理教育センターを改組して、総合情報メディアセンターを設置いたしました。現在、地下1階、地上4階建て、延べ床面積5,300平方メートルの建物を建築中でございます。来年の夏休みには教育機器も含めてすべて移転することになっております。一方、十年来の念願でありました総合博物館も、平成9年4月にメディアセンターと同時に設置され、6,600平方メートルの建物を建設中であり、完成いたしますと旧博物館を合せて12,000平方メートルの大規模博物館となる予定です。これらの組織の改組が先行しました結果、大型計算機センターや学術情報ネットワーク機構を含めた情報基盤整備の策定は、やっとその途についた段階でございます。さすが、東京大学、私どもが建物建築に腐心している間に先を越されたかなというのが正直な実感でございます。

情報基盤の整備には多くの課題がございます。計算サービスの観点からいえば、高機能パーソナルコンピュータ、ワークステーションさらにはクラスタコンピューティングなどによるダウンサイジングされた計算環境と地球シミュレータプロジェクトなどに代表される巨大計算環境の狭間にあって、大学の計算サービスの在り方について今後明確な指針を与える必要があります。また、従来のベクトル処理から超並列処理へとプログラミングパラダイムの一大変革期にあってユーザ教育が非常に重要なものになりましょう。

大学における情報処理教育の立場からいえば、不特定多数の学生が利用する環境での情報倫理の確立、2003年の高等学校の情報教科の発足後の大学での情報教育の策定、専門教育でのマルチメディアの活用と教材作成支援とデータベース化、遠隔講義による国際化の推進など解決すべき多数の問題があります。

京都大学の総合情報メディアセンターの現状は基本的なハードウェアシステムをやっと装備した段階であります。現在、学内には1,200台の端末を置いて、インターネットなどに大変よく利用されていますが、専門教育でのマルチメディアの利用、対話型語学教育、遠隔講義、マルチメディア教材作成支援などはまだ学生からは見えない、つまりまだ余り利用されていないのが実状のようです。特色ある教材作成や遠隔講義など、先生方にいかに教育熱心になっていただくか、大きな問題ですが、今秋よりUCLAとの間で、電波科学、物理学について単位のとれる遠隔講義を行う予定であり、少しずつではありますが、独自色を出しつつあります。

また、組織運営の観点からいえば、情報基盤を支えるセンターの規模が大きくなるに伴い、センターでの業務と研究の両立について十分考慮しておく必要があるかと思えます。業務が忙しくて論文が書けないという声をよく耳にします。若手研究者の研究時間の確保とともに、情報処理教育やネットワーク運用など、従来論文が書きにくい分野での新たな価値観の形成と業績評価の体制を確立することが急務であります。

大学の情報基盤整備につきましては過去の経緯などにより多様な考え方があるかと存じ

ます。私どもも東京大学の先進性のある情報基盤構築を大いに参考にさせて頂きつつ、京都大学としての独自性を模索していきたく存じます。総合情報メディアセンターと致しましては、今後、東京大学の皆様と実際に使える完成度の高い教材や運用ソフトウェアの開発、相互利用など、大いに協力しあい、また、切磋琢磨しながらよりよいセンターを構築していく所存でございますので、よろしくお願い申し上げます。

本日はセンターの設立おめでとうございました。

株式会社日立製作所 桑原 洋副会長 謝辞

ご紹介いただきました、日立の桑原でございます。

本日は、東京大学情報基盤センターの設立、まことにおめでとうございます。

また、この記念すべき式典にお招きいただきまして、また、重ねて感謝状までいただきまして、たいへん光栄に存じております。これを機会にこれまでのご支援にお礼を申し上げたいと思います。

思いおこしますと、1965年に東京大学大型計算機センターが設立されましたと同時に、国産初の大型コンピューターでございます HITAC5020 を納入させていただきました。これは、当時、現在は文部大臣をなさっております有馬先生がアメリカからお帰りになって、国産コンピューターの遅れを危惧されまして、若手の研究者の方々、当時は若かった我々の先輩の人々と情熱を分かち合って開発したものでございます。以降、日本の計算機業界の発展に大いに寄与していただいたというふうに思っております。

また、1976年にアメリカでクレイ社がスーパーコンピューターを発表いたしまして、学術研究の中におけるこのスーパーコンピューターの活用が叫ばれたわけでございます。かなり育ってございました国産各社で努力を積み重ねたわけでございますけれども、1983年に同じく、大型計算機センターに初めて国産のスーパーコンピューターを納入させていただきました。その後、各社とも各大学にいろいろなものをお納めさせていただきましたわけでございます。

現在、このスーパーコンピューターの分野では、日米摩擦が起きるほどに産業が発展しており、これもいわゆる産官学の緊密なる協力のもとで出来上がった、やはり国産技術の育みだというふうに思っております。私も、これから今叫ばれておりますようにインテルに代表される技術を見ましたときに、必ずしも、日本の計算機業界、安堵しておられないような状況でございます。産官学の協力をもう一度強めて、新たな考えのもとで国産技術の発展に力を注いでいきたいというふうに思っております。

今般設立されました基盤センター、例をみないほどに大きな、また、多くの人々が参加をされる計算機システムでございます。ここには必ずや時代のニーズを示唆する新しいことがいくつも出てくることと思っております。我々もつぶさにそういうニーズに耳を傾け、産官学の中で、その実現を図りながら、日本の産業の発展に寄与していきたいと思っております。どうか引き続きましてご支援をお願いしたいと思います。

改めまして、本日の情報基盤センターの設立に、お祝いを申し上げまして、簡単ではございますがご挨拶にかえさせていただきます。

どうもありがとうございました。

日本電気株式会社 西垣浩司社長 謝辞

只今ご紹介賜りました NEC の西垣でございます。たいへん僭越でございますが、一言お祝いを申し上げます。

東京大学情報基盤センター様の設立、心からお慶び申し上げます。

また、先程は感謝状を賜りまして、たいへん光栄に存ずるところ、心から御礼を申し上げます。

私どもは、情報基盤センター様に、学内 LAN を支える ATM スイッチ、ルータ、そして、今回の新教育用計算機システムのサーバー等をご納入させていただきました。特に今回の新教育用計算機システムに関しましては、機器の納入だけでなく、ご指導賜りながらシステムインテグレーションのお手伝いをさせていただきました。

このシステムは、大変画期的なシステムであり、先程ご案内がございましたように、駒場をはじめとする千数百台の Thin Client を束ねる形で、TCO の削減を意図したものでございます。

また、そのためにマイクロソフトの新しい OS (Windows NT Server 4.0 Terminal Server Edition) を導入する際、開発の途上ではご指導賜ることで、システムを作り上げることが出来たわけでございます。

おそらく、これだけの大規模の Thin Client システムというのは、非常にまだ、世の中に数が少ないということであり、これからいろいろ注目をあびていくシステムであろうと考えております。

私どもは、この仕事を通じてたくさんのノウハウ、実際の経験をさせていただきましたことを、これからの業界の発展、あるいはシステムの改善に大いに利用させていただきたいと考えているわけでございます。

このたび、三つの組織が統合されて、新しい基盤センターが設立されたということで、従来にも増して、新しいシステム、新しい技術に対するチャレンジ、ご指導を大いに期待致しているわけでございます。

今、桑原様のほうからスーパーコンピュータの話がございましたが、また同時に、インターネットが爆発的に広がって社会を変えようとしているわけでございます。ただ、私たちから見ますと、まだこれは序の口であり、実際に使われているインフラは、あくまで音声用に作られたものの上でインターネットを使っているにすぎないものであり、始めからインターネットを意識してインフラを築くと、どれだけ大きな変化が起るかということを考えますと、非常に大きな可能性があると考えているわけでございます。

残念ながら、第一世代のインターネット活用、あるいは、関連技術におきましては、完全に米国に置いていかれた訳でございますが、これから始まるその第二、第三世代におきまして、是非、日本が主導権を取れるような立場に立っていないと、大げさではありますが、日本の将来にもかかわるのではないかと僭越ではございますが考えており、情報基盤センター様の各方面からの、ご指導ご鞭撻を、是非期待したいと考えているわけでございます。

大変僭越なことを申し上げましたが、是非、東京大学情報基盤センター様の、益々のご発展、ご活躍されることを心から祈念致しまして、謝辞にかえさせていただきます。

本当にありがとうございました。